

高山におけるシカ食害の状況

伊東吉夫 (植物リサーチクラブ)

はじめに

2009年は北海道のアポイ岳、利尻山、斜里岳、トムラウシ山、雌阿寒岳など都合4回北海道の山を登り、本州では東北の栗駒山、秋田駒ヶ岳、焼石岳を、日本アルプスでは、南アルプスの赤石岳、塩見岳、荒川三山、間ノ岳、農鳥岳、2年続けての北岳など三千メートル峰7座をはじめ40座近くに登頂し、高山植物の写真撮影や、植生調査等を行いました。

多くの高山に登山して気がついた事です、いたる所で高山植物の木本、草本がシカによって食害を受け、山が悲鳴を上げている光景を目の当たりにしました。ここでは、写真に納めたシカの食害の状況を紹介したいと思います。

シカについて

まずシカについて大まかに解説しますと、①シカは草食動物で食べたものを胃で反芻します、②エゾシカの雄は成熟すると体重が100kg以上になります、③雌ジカは1歳半で成熟し、満2歳から出産します、④毎年1頭づつ子供を生みます、⑤シカは一夫多妻です、⑥20歳位まで生き、生涯に生む子供は優に10頭は超えます、⑦個体数の増加率は年間15~20%と推定されます、⑧エゾシカは6月に出産し、11月頃まで雌ジカは子育て、その後交尾期に入ります。

(写真)



(知床住宅街のエゾシカ)



(知床フレペの滝近辺)

シカが増えた理由は色々ありますが、主な理由を列挙すると①里山の手入れがされなくなり、シカの餌となる草木が増え、餌が豊富となった、②地球温暖化により雪が少なくなり餓死するシカが少なくなった、③狩猟登録ハンター数の減少や高齢化などによる捕獲頭数目標の未達成などが上げられます。

各地のシカ食害の状況

どのような植物が食害を受けたか各種報告と自身で目にしたものも含めて取り上げますと、近畿圏では大台ヶ原のトウヒ、ウラジロモミ、ミヤコザサ、スズタケ、キハダが、大峯山脈ではオオヤマレンゲ、八経ヶ岳周辺ではシラビソ、オオヤマレンゲ、コシアブラ、滋賀の山門水源の森ではミツガシワ、ネジキなどが食害を受けています。

私が観察会を行っています箕面公園でもスズタケ、ミヤコザサ、ネジキなどが食害を受けており、京都の貴船方面でもあの祇園祭のチマキに使われるチマキザサ(チュウゴクザサ)がシカの食害を受けて、今では丹後半島宮津などからのササの葉に切り替えているとか。我々の身近にもシカは脅威を及ぼしています。



(大台ヶ原)



(大台ヶ原、ブラウジングライン)

中部、関東方面では日光白根山のシラネアオイが全滅したとの報告があり、東丹沢、奥秩父、富士山麓ではスズタケ、モミ、レンゲツツジ、ウラジロモミ、ミヤマハンノキ、ミネザクラはじめ多くの草本が、九州では屋久島のヘッカシダ、ヤクイヌワラビ、コモチイヌワラビ、サクラツツジ他多くの植物がヤクジカの食害を受けているという報告があります。

私が高山のシカの食害に初めて遭遇したのは、2008年南アルプス仙丈ヶ岳（3033m）へ行った時の事です。標高2700m近くにある馬の背ヒュッテ付近に、マルバダケブキの群生を見て写真を盛んに撮っていたら、稜線のお花畑に黄色のシカ防止柵が幅広く設置されているのが目に入りました。伊那市の設置だそうです、小屋周辺の一部の設置だけでも費用が500万円程度かかっているとの事でした。

馬の背から馬の背ヒュッテ周辺は仙丈ヶ岳で最もシカ食害が激しいとされている場所であることもわかりました。シカは1日に体重の10%に当たる3～5kgもの草を食べるようで、南アルプスでは推定で3万頭おり、年2割の割合で増えているとされるシカに対し、柵はほんの一部だけなので、効果は限定的で抜本的な解決にはほど遠いと思いますが、あの有毒とされるバイケイソウの新芽や、オヤマリンドウなども新芽を食べられていました。(写真)



(マルバダケブキの群生)



この近辺の草地はシナノキンバイやクロユリが多かったようですが、今は芝刈り機で刈ったようになってしまい、いよいよ食べるものがないのかバイケイソウまで食べられているとの小屋の主人の話が印象的でした。

2009年の山登りの際にはさらにシカ食害の恐ろしい光景を目にしました。8月に登った南アルプスの塩見岳（3047m）です。南アルプス大鹿登山口から登り始めると直ぐにシカ食害防止の金網、テープの巻かれたシラビソなどの針葉樹の光景です。金網内の保護領域にはサラシナショウマの白い花穂が見られましたが、金網の外側にはシカが食べないシダ、ヤマハッカ、オオバノイノモトソウの大群落と樹木にはテープの巻かれた景色が見られました。シカのきらいなマルバダケブキもスクスクと育っていました。さらに登り高度が上がると、新芽が食べられ真っ直ぐに伸びられず脇芽が出ている針葉樹の幼木や、成長した木も樹皮が食べられたままで立ち枯れたものも多く見られました。(写真)



(樹皮保護テープ、ヤマハッカ群生)



(ウラジロナナカマドの食害)



(針葉樹の食害)



(立ち枯れの針葉樹)

ウラジロナナカマド、クロマメノキ、ヤマツツジなどの新芽も食べられ、成長が止まるため脇芽からの枝が伸び、木としてのまともな形が見られません。一方有毒のバイケイソウも新芽が食べられて花が見られず、シカの食べないシダが群生しているのと対照的です。

10月に登った甲武信岳(2475m)は甲斐、武蔵、信濃の三国境にある山で、各々の頭文字を取り名付けられたようです。笛吹川、荒川、千曲川の分水嶺になっていて、山頂近くに各々の源流が見られます。6月にはアズマシャクナゲ、7月にはハクサンシャクナゲが咲き、多くの登山客で賑わうようです。山頂への途中に十文字小屋がありますが、ここではシカ対策として、幼木にビニールを巻き付け、自主防衛をしています。ここまで登る途中にはぞっとするようなシカの食害による針葉樹林帯を目にしました。(写真)



(十文字小屋の自主防衛)



(食害を受けた樹皮)

一瞬ここは大台ヶ原?と見間違ふほどの荒れようです。色々な高山を登ってきましたが、素晴らしいお花畑を展開する裾野の広い南アルプスにおいて、シカ食害が進んでいるのを見ると、何とか対策を至急取って下さいと叫びたくなります。

貴重な高山植物、絶滅危惧ⅠA類のキバナノアツモリソウは南アルプスから消えたようです。ライチョウの餌となるシナノキンバイが食害を受け続けると、ライチョウの減少にもつながる

ようです。お花畑を構成する草本が食べつくされ植生が消失し、踏み潰しなども加わって地表の裸地化も懸念されているようです。(地元新聞)

木本においても、北海道では従来食べなかったとされるミズナラやダケカンバなどの樹皮も食べられ、知床ではミズナラのブラウジングライン(ディアーライン)も見られます。(写真)第二、第三の大台ヶ原化があちこちで発生しています。



(知床、ミズナラの食害)



(室蘭岳、ダケカンバの食害)

最後にシカの好物である二種のササについて簡単に紹介いたします。

スズタケは北海道から九州の温帯の山地の林内に群生し、本州中北部では太平洋側のみ、湿度が高いところを好んで生えます。稈の高さ1～3m、径7mm。節が低く基から先まで太さが変わらず弾力性があり、先の方で各節に1本ずつ枝を出し、葉は長さ10～30cm、無毛、革質で硬いといひます。和名のスズは篠と同じで、行李の縁巻きや釣竿の穂先によいそうです。

ミヤコザサは、北海道日高南部、本州太平洋側、四国、九州の山林内に群生するようです。高さ1mぐらい、基部で1～2回分枝することはあっても上部ではしないそうです。節は球状に膨らみ、葉は稈の先に数個集まってつき、長さ10～20cm、裏面に軟毛を密生し、冬に縁が白くなります。和名の都笹は、比叡山で最初に発見されたことから、京都にちなんで名がついたようです。特にスズタケは先の方で分岐するためシカの食害で消失する事が多いようです。

篠山の多紀連山、京都北部のクリンソウの群生、関西の藤原岳、雪彦山などのヤマビルの発生、農作物の被害など我々の身近にもシカの被害やその影響は出ています。我々に生きがいを与えてくれている高山植物にも被害が及んでいることを少しでも皆様へご紹介できれば幸いです。



(屋久島、宮之浦岳登山道途中の湿原のヤクジカ)

参考図書 「世界遺産をシカが喰う シカと森の生態学」湯本、松田編、文一総合出版